



催眠に敗北した天使たち

病み時計

「ちよつと、そのお嬢ちゃん」

「はい？ 私に何……か……」

話しかけられた声に振り向き、内心うわつと思つてしまいました。

そこにいらつしやつたのは私を押しつぶしそうなほど大きく、ずんぐりむっくりな体型のおじさま。頭は禿げ上がり全体に脂ぎっているように見えます。身に着けているものもぼろぼろのTシャツに短パンと清潔感がなく、近くにいるだけ異臭を感じます。もちろん天使として不快感は顔に出しません、内心逃げ出したい気分でした。

「ん、こほん。何かごようですか？」

いけないいけない。天使として民を導くのが私の使命、見た目で人を判断するのは悪しき行為です。ひとつ咳払いしていつものスマイルを取り戻しま

す。

「ええ、ちよつと道を伺いたくて。この建物なんです……」

「なるほど、どれど……れ……」

道案内と聞いて内心安堵です。不審者でなくて良かった。

警戒を解いた私はおじさまが差し出すスマートフォンを見つめました。

画面に写っていたのは奇妙な模様……？

それを見てみると、なんだか……頭がぼんやりするよう……

「ちゃ……ん……お姉ちゃん！」

「はっ!?」

自分を呼ぶ声で意識を取り戻しました。どうやら往來で少し気を失っていたようです。

私としたことがお恥ずかしい……

「すみません、もう大丈夫です。それで何の御用でしたっけ？」

姿勢を直し、起こしてくれた『少年』に向き直ります。

年のころは三十から四十代頃でしょうか。

ゴツゴツと節くれだつた手が私の胸とお尻を押し、体を寄せて倒れないよう支えてくれます。

顔にかかる荒い息は女を孕ませんとするエネルギーを放っていました。

「うん……ぼく、ラファイエルお姉ちゃんのことが好きなんだ。ぼくの『恋人』になつてくれないかなあ……」

「まあ、それはそれは……」

予想外のお願いに少し驚きます。

天界にいた頃や人間界に来てからも交際を申し込まれることはありましたが、こんなに『幼い』方からされたのは初めての経験でした。

今のところどなたかと交際する気はないのですが……
こども純粋な目で見られると抗いがたいものを感じてしまいますね。

「ちなみに、私のどんところが好きなんですか？」

「えつと……バカみたいにでつかいおっぱいと、何人でも産めそうな安産型のケツかな。見てるだけムラムラして今すぐ孕ませたくなるんだ」

「ふふ、そうですね」

やっぱり少年らしくて『微笑ましい』理由ですね。

でもちよつと言葉遣いが乱暴な気もします。歪んだ大人にならないように今のうちからちゃんと教えてあげた方がいいのかも……

「そうですね……今すぐお付き合いすることはできません。ですが私があなたを一人前の男性に育て上げますので、ちゃんと言うことを聞いたら考えてあげますよ？」

「ほんと……？ わかった！」

彼は告白が成就しなかったことで少し落ち込んだようでしたが、最後には顔を明るく輝かせました。

やっぱり身体が大きくてもまだまだ子どもですね。簡単にはしゃいじやつて。

成り行きとはいえ良い機会ですから、女性の扱い方というものをしっかり教えて差し上げましょう。

私は彼を自室へと招き、ベッドに横たわりました。

身につけていた制服、シャツ、スカート、ブラジャーと一枚一枚脱いでいきます。最後に靴下まできっちり脱いで一糸まとわぬ姿のままよく見えるように足を広げました。

まだ誰にも、サターニヤさんにすら見せていない穴がさらけ出されます。さすがに少し恥ずかしいですね……

「いいですか？ ここがおまんこと言っておちんちんを出し入れする穴です。ここに精液をびゅっぴゅっすることで赤ちゃんができるんですね。さっそくやってみましょう」

「はあ……はあ……ラファイお姉ちゃんのおマンコ……」

少年も同じく裸で私を見下ろしています。股間を凝視して興味津々といった様子。

彼のペニスと同年代の子に比べれば『ちよつと』大きいくらいでしょうか。

赤黒くそそり立ち、硬く大きくなったそれは先端

から透明の液体を垂らしていました。

私もこういった経験は初めてですが、一通りのことは学校で習いましたし、大丈夫でしょう。『年上』としてきっちりリードしてあげないと。

猛烈な圧を放つ巨体が少しずつ近づき、勃起した肉棒が今にも挿入されようとしています。

こんな大きなモノ入れられたら妊娠してしまうでしょうか……

いえ、私もガヴちゃんには劣っていたものの優等生。おちんちんになんて負けるはずがありません。

「そうです、そのまま……んぎいつ!？」

じつくりと狙いを定めた後、おまんこへとペニス
が垂直に挿入されました。

体重をかけての挿入は未熟な穴を強引に押し開け、
あつという間に奥までたどり着きます。

仰向けに寝転ぶ私へ少年の巨体が覆いかぶさって

きました。

胸が、手足が、お腹が……潰されて苦しい……!!

「気持ちいいっ! お姉ちゃんのおマンコ気持ちいいよっ!」

「も、もつと……やさしく……!!」

私の願いも空しく、彼はさながら発情期の獣のよう
に激しく腰を上下させてきます。

その度におまんこの中がごりゅごりゅと拡張され、
未知の快感が私を支配しました。

頭が……チカチカしゅりゅ……♡

「お姉ちゃん、キスしよー んぶゆつ」

「んうっ!? じゅりゅるう……んびゅう……」

舌を入れての濃厚なディーブキス……♡

絡められた舌から唾液が流し込まれ、脳がとろけて
しまいそうに気持ちいいです。

もはや身体に力は入らず、私はすっかり彼になされるがままでした。

「ううっ……も、もう出る…………！」

出る……出るっていったい何が……？

って、中に出されるのはマズいのでは！
でもなんでマズいんですしたっけ……？

びゅびゅっ♡どびゅびゅっ♡ぼっびゅっどぼっ

「うえっ♡ んああっ♡ イグっイグうっっ♡」

身体の奥からほとばしるような熱さが全身を駆け巡りました。

自分が今確かに誰かと繋がって、情熱的な愛を注がれていく幸福感。

ああ、私はこの快感を知るために下界へ来たんだ……
なんてことを思ったり。

「も、もっともっどー！」

「え……ちよっ、休ませてえ……ん、お、っ♡」

少年の性欲はまだまだ底が尽きないようで、結局私が解放されたのは日が沈み切ってからでした、

全身を汗でぐっしりと濡らし、室内は愛液と精液、汗が交じり合っって濃厚な発情臭で満ちています。

ようやく少し冷静になった私はおまんこから溢れる精液をティッシュで拭い始めたものの、たっぷり出されてしまったので拭っても拭っても溢れてきま

す。
「じよ、女性との行為はもっど優しく紳士的にやらないとダメじゃないですか……！」

ベッドに腰掛け一息つく少年に、私は精一杯の抗議をしました。

「え？ そんなことないよね？」

彼は悪びれることなく付近にあったスマホをこちらに向けます。

それを見るとまた意識が……

あ、あれ？ 何だか私が間違っている気がしてきました。

いけません、ミスをしたらすぐに訂正しないと。

「そ、そうですね。すべてのメスはたくましい男性の子を孕むことが至上の喜びなので、たくさん子どもを産ませてあげましょう。失敗しないよう私でたくさん練習してくださいね」

私としたことが初めての経験で少し混乱していたようです。

何はともあれまだスタートラインに立ったばかり。彼が道を踏み外すことのないようしつかりしなくては………！

「……ラファイエル、あんた何か雰囲気変わった？」

「え？ そんなことないと思いますわ」

「そ、そうよね。勘違いだったわ」

トイレから連れ立って帰る道すがら、サターニヤさんが変なことを言い出しました。

まったく急に何をおっしゃるんでしょう。私は『普段通り』だというのに。

しかし、ちよつとスースーしますね。

今の私の制服は夏服のため布面積が控えめになっています。

上に羽織るベストは半分以上がカットされ、下に

シャツやブラもつけていないためおっぱいからおへそまで全て丸見え。

下はスカートが股上五センチという長さのため、股間に食い込んでいるマイクロビキニまで全部晒された状態です。

これでは少しばかり冷えるのも仕方ないでしょう……とはいえ少年への正しい教育の為にも妥協は許されません！

「ただいま戻りました〜」

「んぐ……げふっ、おかえり二人とも」

私が席を離れる間、少年のお世話をウィーネさんに頼んでおいたのですがきちんとこなしてくれたようです。

お口で精処理をしてくれたらしく、彼女の端正な口元にはちぢれ毛がついています。近づくと吐息から濃厚なザーメン臭が漂ってきました。

頬についた精液を手で拭い、小さな舌でチロチロ舐め取る様子は女の私から見ても非常にセクシーで……つて、友人相手になんてことを！

邪な考えを頭を振って追い出し私の席に座る少年の上に跨ります。

ビキニを僅かにずらし、くれぐれもおちんぼを傷つけることがないようにそーつと……どちゅん♡

腰を下ろした途端身体の芯を貫くような気持ちよさに襲われますが、唇を噛みしめてなんとか絶頂しないように堪えました。

危ないところでした……！

いくら私が彼専用の生ハメオナホールとして認知されているとしても、挿入するたびにイキまくる淫乱女だなんて思われるのは恥ずかしいですからね……

／／／

「ふふっ、ラファイったら本当にこの子と仲が良いの

ね♪」

「そうなんです……んうっ♡……甘えられるのもおっ♡なかなか新鮮でえ……！ うぎいっ!? ち、乳首つねらないでくださいいっ♡」

「おまんこからのどちゅ♡どちゅ♡という快感には何とか耐えていたのですが、いっぺんに両方の乳首をねじられたこととどうとう無様なアへ顔を晒してしまいました。」

「そんな私の痴態をヴィーネさんは微笑まし気に眺めています。」

「貴女だつて口にちぢれ毛ついたままですからね……！ という指摘をする余裕もなく、教室という場でありながら私は身体を弄ばれ続けました。」

催眠に敗北した天使たち

発行日 2020年3月14日

著者 病み時計
<https://www.pixiv.net/member.php?id=9971234>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
